

# ズバリ直言

金丸 弘美

地域の連携の動きが各地で相次いでいる。生産と加工、宿泊と観光、レストランと農家など広域に、若い人たちがそれぞれのスキルを活かして手をつなぐことで

経済を回していく仕組みだ。

山口県の瀬戸内海の離島・周防大島では、農家のかんきつを中心とする果実を瀬戸内ジャムスガーデンの喫茶室のある店舗がジャムにして販売。養蜂家が運営するハチミツ主体のカフェ、漁業を連携

したモズクやイリコなどの加工などを互いに紹介し、売り先も連携して開拓。島内に来る人は、農家宿泊を紹介して観光トリピートにつなぐ、といった取り組みだ。

埼玉県さいたま市「ヨーロッパ野菜研究会」は、レストランで使

う野菜を種苗会社、食中流通業者、行政との連携でニーズに合ったものを栽培し販売。大学も入り決済や販売管理システムも作った。

長崎県大村市「おおむら夢ファームシユシユ」では、直売所・レストラン・体験教室・体験農業・

農家民泊を連携。さらにウエディング、法事までも直売所で行い、地産地消の食事を提供する。

今は、ただ農産物を作って出荷すればいいという時代ではなく、食べてみたい、使ってみたいという消費者の要望をうまくつかみながら、しかし

## 地域連携でニーズ掘り起こし

相手の言うなりではなく、こちらの個性

もしっかりだしながら販売を進めていく形が、現場では大きな動きになっている。そして、現場に来て体験したいという新たなニーズも掘り起こしている。

(食環境ジャーナリスト、食総合プロデューサー)